

関西学院大学主催  
春季人権問題講演会

# 軍事独裁政権国家 ビルマ(ミャンマー)の今

◆ 2008年6月19日(木)

● 午後1時30分～午後3時

場所／西宮上ヶ原キャンパス  
大学図書館ホール

● 午後4時50分～午後6時20分

場所／神戸三田キャンパス  
Ⅱ号館201号教室

◆ 講師／宇<sup>う</sup>田<sup>だ</sup>有<sup>ゆう</sup>三<sup>そう</sup>氏  
(フォトジャーナリスト)

\*本講演会では手話通訳/パソコンテイクによる情報保障を予定しています。  
また、録音、録画を行い図書館資料として保存しますのでご活用下さい。

## ■講演内容

東南アジア最後の軍事政権国家ビルマ(ミャンマー)で何が起きているのか。その実態が報道されることは極めて希である。2007年9月に起こった抗議デモに続き、今年5月には未曾有のサイクロン被害を受け、ようやくこの国の姿も国際社会に伝わるようになってきた。だが、取材制限のある国のため、その報道内容も限られたものにならざるを得ない。

ビルマでは、言論の自由は厳しく制限され、自らの生活を向上させようとする活動も抑え込まれている。大きな政治課題である民主化問題の陰で、普通の人は何を考え、どのような暮らしをしているのか。

93年から15年間毎年ビルマを訪れ、現地にて延べ4年半滞在してきた。この間、外国人だからこそ許された機会を利用し、ビルマ全土に足を運んできた。外国人が減りに訪れることのない地方には、知られざるビルマが想像以上に存在していた。「辺境」では、自らの民族名を表に出すことの出来ない人びとがいた。60年にも及ぶ内戦は、世界で最も古い紛争にもなっている。

今、ビルマで起きていることは、海の向こうの国の話ではない。強権的な力が支配するビルマを通して、「国とは、民族とは、人権とは」を考える機会となればいい。

また、ビルマの軍事政権と日本とは、歴史的に強い結びつきがあることも忘れてはならない。

## ■講師紹介

フォトジャーナリスト。1963年神戸生まれ。90年、教員を経て渡米。92年、中米の紛争地エルサルバドルの取材を皮切りに取材活動を開始。現在、東南アジアや中米諸国を中心に、軍事政権下の人びとの暮らし・先住民族・世界の貧困などの取材を続ける。

95年、神戸大学大学院国際協力研究科で国際法を学ぶ(法学修士)

98年平和・共同ジャーナリスト基金奨励賞、02年日本ジャーナリスト会議・黒田清新人賞。04年「国際人権教材アワード2004」(ヒューライツ大阪)受賞。写真集に『ビルマ軍事政権下に生きる人びと 1993-2005』(解放出版)など。

## 写真展の開催

宇田有三氏の写真展を2008年6月23日(月)～6月27日(金)まで吉岡記念館ラウンジで開催いたします。

総合テーマ：  
Culture of Human Rights  
一人権文化を育む  
(2005～2009年度)





関西学院大学主催  
春季人権問題講演会

# 窪塚洋介と 平成ネオ・ナショナリズム

—スピリチュアル・ブームと愛国心のゆくえ—

◆ 2008年6月20日(金)  
午後1時30分～午後3時

◆ 場所／西宮上ヶ原キャンパス  
大学図書館ホール

◆ 講師／<sup>なか</sup> <sup>じま</sup> <sup>たけ</sup> <sup>し</sup> 中 島 岳 志 氏  
(北海道大学大学院法学研究科・公共政策大学院准教授)

\*本講演会では手話通訳・パソコンテイクによる情報保障を予定しています。  
また、録音、録画を行い図書館資料として保存しますのでご活用下さい。

## ■講師紹介

大阪出身。大阪外国語大学卒業、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了(京都大学博士・地域研究)。現在、北海道大学大学院法学研究科・公共政策大学院准教授。専門はアジア政治論、日本政治思想史。

著書に『ヒンドゥー・ナショナリズム』(中公新書ラクレ)『中村屋のポーズ』(白水社)、『ナショナリズムと宗教』(春風社)、『インドの時代』(新潮社)、『パール判事』(白水社)などがある。

## ■講演内容

現代日本ではナショナリズムが高揚しているといわれます。特に若い世代におけるナショナリズムの高揚が問題視され、靖国問題や対中外交、歴史教科書問題などと絡めて批判されることが多くなってきています。しかし、若い世代のナショナリズムが、以前のナショナリズムとどのような質的な差異を有しているかについて、しっかりとした分析や批評を行っているものは、余り多くありません。

この講演では、俳優・窪塚洋介の歩みに注目し、スピリチュアリティとナショナリズムが融合する新しいタイプのナショナリズム(私はこれを「平成ネオ・ナショナリズム」と呼びます)について議論したいと思えます。そして、問題の根源が「存在論的問い」や「自分探し」「疎外」という普遍的課題と通底していることを論じたいと思えます。

総合テーマ：  
Culture of Human Rights  
—人権文化を育む  
(2005～2009年度)





関西学院大学主催  
秋季人権問題講演会

# 今、改めて 人権について考える

～世界人権宣言60周年を迎えて～

◆ 2008年11月25日(火)

午後1時30分～午後3時

◆ 場所／西宮上ヶ原キャンパス  
大学図書館ホール

◆ 講師／<sup>とも</sup>友 <sup>なが</sup>永 <sup>けん</sup>健 <sup>ぞう</sup>三 氏  
(社団法人 部落解放・人権研究所所長)

\*本講演会では手話通訳/パソコンテイクによる情報保障を予定しています。  
また、録音、録画を行い図書館資料として保存しますのでご活用下さい。

## ■講演内容

1948年12月10日、国連の第3回総会で世界人権宣言が採択されました。この宣言は、第2次世界大戦を深く反省することの中から「差別を撤廃し、人権を確立することが恒久平和を実現することに通じる」という考え方を基本精神としています。それ以降、60年が経過しますが、わたしたちをとりまいている平和と人権をめぐる状況を直視したとき、改めてこの宣言の基本精神に立ち返り、世界人権宣言の実現に向けた取組を各方面で強化することが求められています。このため、人権とは何か、人権の歩み、今日の到達点、これからの課題を皆さんとともに考えてみたいと思います。

## ■講師紹介

1944年 大阪市に生まれる

1969年 大阪市立大学文学部哲学科卒業

現在 ●(社)部落解放・人権研究所所長●世界人権宣言大阪連絡会議事務局長  
●部落解放・人権政策確立要求運動中央実行委員会事務局次長●反差別国際運動事務局次長、反差別国際運動日本委員会理事●(財)アジア太平洋人権情報センター評議員●大阪市立大学 非常勤講師●関西学院大学 非常勤講師

著書 ●『人権の21世紀へ 部落解放運動の挑戦』解放出版社(1998年)  
●企同連ブックレット16『人権の21世紀と企業』(1999年)●人権ブックレット58『いかそう人権教育・啓発推進法』解放出版社(2001年)●ヒューマンライツベーシック『いま、改めて「部落地名総鑑」差別事件を問う』解放出版社(2006年)

共著 ●国際人権ブックレット10『地球規模で捉えるカースト差別・部落差別の今』ヒューライツ大阪(2003年)●(社)部落解放・人権研究所編『地域に根ざす人権条例 人をつなげるまちづくり』解放出版社(2003年)●沖浦和光・寺木伸明・友永健三編著『アジアの身分制と差別』解放出版社(2004年)●(社)部落解放・人権研究所編『人権文化をみんなの手に「人権教育のための世界プログラム」スタート』解放出版社(2005年)●(社)部落解放・人権研究所編『日本から世界への発信 職業と世系に基づく差別』解放出版社(2005年)

## 【パネル展の開催】

世界人権宣言の前文と第1条から第30条までの各条文を黒田征太郎氏のイラスト付でわかりやすく表現したパネル展が、2008年11月25日(火)～11月28日(金)まで吉岡記念館ラウンジで開催されます。

総合テーマ：  
Culture of Human Rights  
一人権文化を育む  
(2005～2009年度)







# 世界はもっと豊かだし 人はもっと優しい

—不安と不信のスパイラルを抜け出すために—

## ◆ 2008年11月27日(木)

● 午前11時10分～午後0時40分

場所／西宮上ヶ原キャンパス  
大学図書館ホール

● 午後3時10分～午後4時40分

場所／神戸三田キャンパス  
Ⅱ号館102号教室

◆ 講師／<sup>もり</sup>森 <sup>たつ</sup>達 <sup>や</sup>也 氏

(映画監督/作家)

\*本講演会では手話通訳/パソコンテイクによる情報保障を予定しています。  
また、録音、録画を行い図書館資料として保存しますのでご利用下さい。

### ■講演内容

オウム真理教による地下鉄サリン事件以降、他者に対する不安と恐怖を激しく喚起された日本社会は、とても激しく変貌した。その最大のポイントは危機管理意識の高揚だ。セキュリティ強化を枕詞に監視カメラは増殖し、街のいたるところには「特別警戒実施中」や「テロ警戒中」などの標語が氾濫し、JRに乗れば「不審物を見かけましたら・・・」式のアナウンスがくりかえされる。自警団や警察官の数は急激に増え、警備会社などのセキュリティ業界は大幅に売り上げを増大させている。

この過剰なセキュリティ状況で、皮肉なことに人はさらに不安を掻き立てられる。見えない敵が怖くなり、見えない敵の可視化を図る。つまり仮想敵の現出だ。国内的にはテロ国家。そして国内的には犯罪者がこれに嵌め込まれ、悪を許すなどの正義は高揚し、厳罰化は進行する（この究極のひとつに死刑制度がある）。こうして法が変わりシステムが変わり人の意識が変わる。

こんな時代だからこそメディアは何をなすべきなのか、あるいは何をなしていないのかを考えたい。

### ■講師紹介

1980年に大学を卒業。

1985年、(株)テレコム・ジャパン入社 テレビ・ディレクターとなる。

1998年、オウム真理教の荒木浩を主人公とするドキュメンタリー映画「A」を公開、各国映画祭に出品し、海外でも高い評価を受ける。

2001年、続編「A2」が、山形国際ドキュメンタリー映画祭で特別賞・市民賞を受賞。

著書に「放送禁止歌」（光文社知恵の森文庫）、「『A』マスコミが報道しなかったオウムの素顔」、「クワン・デ～もう一人のラストエンペラー」『世界が完全に思考停止する前に』『職業欄はエスパー』（角川文庫）、「A2」（現代書館）、「世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい」（ちくま文庫）、「下山事件」『東京番外地』（新潮社）、「池袋シネマ青春譜」（柏書房）、「いのちの食べかた」『世界を信じるためのメソッド』（理論社）、「戦争の世紀を超えて」『ぼくの歌・みんなの歌』（講談社）、「ドキュメンタリーは嘘をつく」（草思社）、「王様は裸だと言った子どもはその後どうなったか」『ご臨終メディア』（集英社）、「悪役レスラーは笑う」（岩波新書）、「死刑」（朝日出版社）など多数。

総合テーマ：

Culture of Human Rights

一人権文化を育む

(2005～2009年度)